

地域固有の文化力、
高度な技術力を活用し、
地域活性化や人材育成を進める関西。
世界的な不況のなかで、
地域の持続的発展の芽はどこにあるのか？
世界に誇り、地域の明日を拓く、
関西の底力を探る。

世界に誇り明日を拓く

関西の 底力

淡路島

神事と芸能の融合

淡路島の南端に建つ大鳴門橋記念館内に、古典芸能「淡路人形浄瑠璃」を継承し、内外で公演活動を行っている「淡路人形座」の本拠、「淡路人形浄瑠璃館」がある。定時公演は一日五回。人形のしくみや操り方を紹介する人形教室のあと、「傾城阿波鳴門」巡礼歌の段が始まった。胸に響き、心に沁み込む太棹三味線と義太夫節。巡礼となって親捜しの旅を続ける娘お鶴が、それと知らないまま、実の母お弓と再会する名場面が舞台で演じられ、観る者の涙をさそう……。

淡路人形浄瑠璃館支配人の坂東千秋さんによれば、遠い昔、豊漁と安全祈願の神事として淡路島に伝わった人形芝居に、約四百年前、三味線を伴う語り物（浄瑠璃）を取り入れて独特の人形浄瑠璃が誕生。江戸時代、隆盛を誇って島内に四十以上の座ができ、各座が舞台道具を満載した荷車をひいて、東北から九州まで各地を旅巡業。丸太を組み、ムシロで囲った野



巡礼お鶴人形

コミュニティ発、世界へ、
無形文化遺産・淡路人形浄瑠璃

掛け小屋で熱演した。今年、ユネスコの世界無形遺産に登録される予定の「人形浄瑠璃文楽」も、江戸時代、淡路島から大坂に向いた植村文楽軒が興行小屋を開いたことに端を発する。

しかし近代以降、さまざまな演劇、演芸やラジオ、映画の人氣に、淡路人形浄瑠璃は後継者難となって衰退の道を辿り、戦争や戦後の混乱期を経て、存続すら危ぶまれる事態になった。

そこで一九六九年、後継者育成と淡路人形浄瑠璃の存続を図るため、島内一市十町（当時）が（財）淡路人形協会を設立。七六年には淡路人形浄瑠璃が国の重要無形民俗文化財に指定され、地区の子供会や小・中・高校、社会人との連携を深め、積極的に普及活動を展開していた。

次世代へ、地域文化の伝承

現在、淡路人形座がとりわけ力を入れているのが、小・中・高校での普及活動だ。人形遣いの技や道具類、太夫や三味線の役割、三味線の作り方や音の鳴らし方、腹式呼吸による義太夫節の語り方など、実演を交えて説明すると、子供たちは目を輝かせて話を聞き、熱心に質問し、体験するという。これら地道な普及啓発活動が評価され、淡路人形浄瑠璃は、〇七年、ユネスコ・アジア文化センターが創設した第一回「コミュニティにおける無形文化遺産の活性化の優良事例コンテスト」で優良事例の一つ

- ①「絵本太功記(たいこうき)」に登場する加藤正清(まさきよ)の人形 ②人形教室では、武者の角目頭(かどめかしら)の操り方の説明もある
③「傾城阿波鳴門」巡礼歌の段を語る大夫と太棹三味線の演奏



淡路島南端、「淡路人形浄瑠璃館」にほど近い、大鳴門橋の下から鳴門の渦潮を見る

に選ばれた。

「淡路島には大学がなく、就職先も少ないので、ほとんどの子供たちは高校を卒業すると、京阪神など島外に出ていきます。そんな彼らが、自分の故郷には、世界的に有名な淡路人形浄瑠璃がある、ということを誇りにしてくれれば」。坂東さんは、地域での普及活動に託す思いをそう語る。

日本神話の始まり、イザナギとイザナミによる国生みの舞台として知られる淡路島は、古来、漁業と瀬戸内海交易の拠点として列島社会の形成、発展に寄与してきた。島の農業も、農閑期がなく、米やタマネギ、レタス、キヤベツ、花卉など、通年でさまざまな作物を栽培してきた。そんな勤勉な島人たちが育んできた淡路人形浄瑠璃の技と精神が次世代の若者たちを鼓舞し、将来、それぞれの生活舞台で新たな生き方を見つけ、伸ばすことができれば、どんなに素晴らしいことだろう。

もちろん、人形浄瑠璃を自らの人生の舞台に選ぶ若者もいる。「現在の団員のほとんどは、中学や高校時代、地元で人形浄瑠璃を観劇、体験して、その魅力に目覚めたのをきっかけに入団してきました。さいわい、人形座には、人間国宝の師匠・鶴澤友路をはじめ、優れた太夫・三味線、人形遣いがいて、国内ばかりか、欧米などでも公演を行い、高い評価を得ています」と坂東さん。実際、この取材直後も、淡路人形座は一カ月間、カナダ・アメリカ公演に旅立った。



④⑤ 淡路人形浄瑠璃の稽古をする、南あわじ市立南淡(なんだん)中学校郷土芸能部の部員たち。部活動として淡路人形浄瑠璃に取り組んで26年になる
⑥ 南あわじ春景色。淡路人形浄瑠璃は2年前、ユネスコ・アジア文化センターの「コミュニティにおける無形文化遺産の活性化の優良事例」に選ばれた



奈良

海外の文化遺産修復も担う 復原研究と匠の技

良

千三百年の時を超え、「大極殿」復原へ

奈良盆地北端。東に若草山、西に生駒山を見晴らす広々とした平城宮跡の一角に、巨大な格納庫のような仮屋がそびえている。二〇一〇年の平城遷都千三百年に合わせ、文部科学省の外局である文化庁が実施している「第一次大極殿正殿復原事業」の建設現場である。

この大極殿復原工事は、〇一年度から始まった。「でも、私たちが大極殿の復原研究を始めてから、四半世紀以上過ぎているんです」と奈良文化財研究所(奈文研)文化遺産部建造物研究室長の窪寺茂さんは言う。

復原研究は、大極殿の発掘調査から始まった。しかしその遺構は奈良時代後期に失われ、発掘調査では基壇の規模や階段の位置が判明した程度だった。以後、奈文研は、奈良時代とその前後の時代の建築研究に力を注いだ。

さいわい、飛鳥時代から奈良時代に至る木造建築が三十棟、奈良県内に現存する。「大極殿は、平城宮の中で国家的な儀式を行うメインホールで、寺院では金堂にあたります」。そこで、建築構造の復原基準を法隆寺金堂とし、組物(屋根と軒を支える構造材)などの意匠の基準を薬師寺東塔とした。そして現存する三十棟の実測データなどを解析。「古代建築の設計手法、設計理論を明らかにして復原設計に適用することで、大極殿の全体像を描き出しました」

こうした何十年にもわたる復原研究の成果と現在の建





①アンコール遺跡内の西トップ寺院の発掘調査 ②現地事務所において出土遺物の整理を行う調査員たち (①②とも、奈良文化財研究所提供)
③奈良文化財研究所がカンボジア国内で共同発掘調査を行った窯跡の復元模型を確認する杉山 洋さん

④大極殿正殿に掛けられる扁額(へんがく)の文字を検討する窪寺 茂さん
⑤平城宮跡内の遺構展示館で公開されている、奈良文化財研究所制作の大極殿復元模型(10分の1縮尺)
⑥復元中の、大極殿正殿の屋根を支える尾垂木(おだるき)木口金具の取り付け(提供:文部科学省)

奈良

築基準法に基づいて復元設計を完成させ、○一年度から文化庁が大極殿正殿復元工事を開始した。その復元工事自体、できるだけ奈良時代の材料、加工法、道具、技術、技法での復元を目指したものだ。それがなぜ可能だったのか。そこには脈々と受け継がれた匠の技の存在がある、と窪寺さんは力を込める。

何代にもわたって古建築の修理に携わってきた宮大工の末裔たちが、出土品や絵図などから復元された道具を駆使して、当時の技法で木を削り、磨き、孔をうがち、柱を立て、梁を渡し、組み上げていく。尾垂木おだるきなどに取付けた金具や彩色も同様だ。さらに瓦職人が奈良時代の製法に習い、大極殿周辺から出土した遺物に基づいて焼いた瓦を葺いていく。左官が往時の工法を再現して土をこね、壁を塗り、ようやく完成していくのである。

アンコール遺跡の保存、修復

奈文研の取り組みは国内に留まらず、近年、海外での共同調査研究が増えている。その好例が、カンボジアプロジェクトである。

カンボジア内戦終結後の一九九三年から、奈文研では世界の研究機関とともに現地の文化財保存組織との共同研究や人材交流、人材育成に携わってきた。そのなかで○二年から現地組織と取り組んだのが、アンコール遺跡内の西トップ寺院の共同研究事業である。

西トップ寺院は、過去のフランスの研究機関の調査で

十世紀頃創建されたヒンズー寺院跡として知られていた。ところが奈文研による発掘調査が進むにつれて、同遺跡が十三世紀頃に仏教寺院として再興され、十四、十五世紀には仏教施設を増設。以後、地元の人々の信仰の場として存続してきたことが明らかになってきた。規模は小さいが、アンコール遺跡でもかなり重要な発見である。

九三年以来カンボジアプロジェクトを担当す

る、奈文研・飛鳥資料館学芸室長の杉山 洋さんによれば、カンボジアではアンコール遺跡、とりわけアンコール・ワットは多くの国民にとって心の拠りどころとなっている。実際、調査中、西トップ寺院に近所のおばさんが線香を供えに来ることもあり、そこが信仰の場として「生きている」ことを実感する、という。

但し、西トップ寺院の一部に崩壊の危険性があり、奈文研でも修復事業への取り組みが重要課題となってきた。既に現地では、このプロジェクトを通して奈文研で研修を受けた現地の若者が文化財保護分野で活躍し始めた。近い将来、彼らが中心になって、文字どおり、国民の文化遺産、アンコール遺跡の調査研究や保存、修復事業を推進していくに違いない。

「奈文研がこれまで国内の調査・研究で培ってきた技術、経験を、今後もっと海外の新興諸国との文化協力、文化貢献に生かしていきたい」と杉山さんは抱負を語る。



平城宮跡の南端に復元された朱雀門

西陣

世界に誇る生活文化、
国際観光都市・京都西陣からの発信

観光客を魅了する確かな技と艶やかさ

京都市上京区の西陣織会館の二階に上がると、奥からカタカタ、タンタンというリズムミカルな機織はた織の音が聞こえてきた。近づくると、大きなジャカード式手機てばたの前に座った手織の名手・藤原弘子さんが、焦げ茶地に金箔の模様を織り込んだシックな帯を軽やかな手つきで織っていた。足元の踏木ふみぎを踏むごとに、無数の経糸たていとが上下し、その間に、緯糸よこいとを巻き込んだ舟形の杼ひが投げ込まれ、タンタンと箴おさを打ちこんで、緯糸を詰めていく。見とれてみると、一階のステージで、カメラを持った多くの観光客が取り囲むなか、艶やかな着物ショーが始まった。

西陣織工業組合相談役の早瀬勝さんによれば、西陣織会館を訪れる観光客は、昨年三月末までの一年間で五十五万人余り。「この数年、中国からのお客さまが急増し、来館者の約四割。日本人は約二五％。残りが韓国や東南アジア、欧米などの方々です」。とりわけ海外からの観光客に好評なのが、日に何度も開催される着物ショーである。花鳥風月など豊かな四季を意匠化し、優れた染と織の技術を駆使してつくられ、また着古したあとも仕立て直され何度も甦る着物は、環境との共生のなかで生まれ、発展してきた日本の生活文化の象徴として、アジアや欧米をはじめ、世界中の人々を虜にしてきた。

西陣

もちろん、西陣織に興味のある人には、二階の実演コーナーを見逃すことはできない。さまざまな手機の機織や綴織^{つづれおり}だけでなく、刺繍や鹿の子絞^{かのこしぼり}、さらには精巧な竹細工を駆使した箴づくりの実演まである。また希望者は小紋や浴衣、あるいは憧れの舞妓芸妓の衣装や十二単の着付け体験もできる。

西陣織工業組合が観光客向けに着物ショーなどのイベントを始めたのは、一九七〇年、大阪で開催された万博に関連して急増した観光客へのサービスがきっかけだった。その六年後に現在の西陣織会館を建て、生活文化の欧米化などで落ち込みが目立っていた西陣織をはじめとした和装業界のテコ入れのため、体験型イベントを充実させていった。

着物文化の継承と職人育成に賭ける

「二日前、近くの中学校へ着物を持って行き、着付けをし、体育館の中を二時間ほど歩いてもらいました。最近のお母さんは着物を持っていない方も多いので、できるだけ若い人に着物の良さを味わってほしい。着物を着ると、背筋も伸びて気持ちもシャキッとするでしょ」

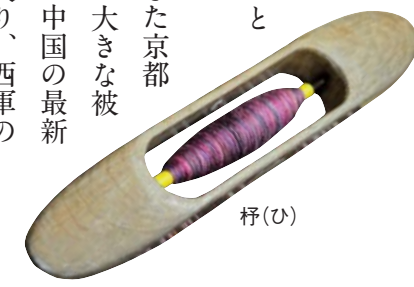
着物人口の減少に危機感を募らせる早瀬さんたちは、修学旅行が途絶える冬場、京都市内の中学校へ出向いて、着物体験や手織り体験の出張サービスに力を注いでいる。

結局、地道な努力を積み重ねていく以外に道はない。

バブル崩壊後、和装業界の低迷は著しいが、ずっと昔から浮き沈みは激しかったんです、と早瀬さんは言う。

例えば、平安時代以降、着実に発展してきた京都の絹織物業者たちは、室町時代、応仁の乱で大きな被害を受け、堺などの新興都市に疎開。そこで中国の最新織物技術を吸収。応仁の乱終息後に京都に戻り、西軍の陣地跡に居着いて（「西陣」の起源）、新たな織物文化を開花させた。やがて江戸時代になって隆盛を極めたが、江戸時代後期に火災や凶作、新興産地の台頭などでつまづき、明治維新後、首都が東京になったことが追い打ちをかけて大不況を経験。その直後、西陣から技術者三人をヨーロッパへ派遣。彼らは、当時最新のジャカードやボタン式機織機械を西陣に導入して技術力を高め、再び活気を取り戻す。戦時中、贅沢禁止で息をひそめていた西陣は、戦後の高度成長期、「ガチャ万」（ガチャツと織ること）に万円単位で儲かること（景気に沸くなど、アップダウンを繰り返してきた）。

「現在、不況といっても、組合には六百社近くが加盟しており、織り手もまだおられます。ただ、問題は、杼や箴など機織道具の職人さんがほとんどおられないことです」。今後、組合が中心になって後継者育成に取り組んでいく、と早瀬さんは決意を語る。応仁の乱や明治維新、太平洋戦争など、業界存亡の危機を世界との交流のなかで乗り越えてきた西陣。人材登用の可能性が高まる不況期こそ、新たな活路を切り拓く好機かもしれない。



杼(ひ)

①西陣織会館2階の実演コーナー ②国際観光都市・京都。祇園・花見小路の外国人観光客 ③西陣地区の、風情ある昔ながらの街並み ④西陣織会館での着物ショー ⑤機織で、緯糸を詰める竹箴(たけおさ)づくり ⑥金糸で刺繍がほどこされる西陣帯



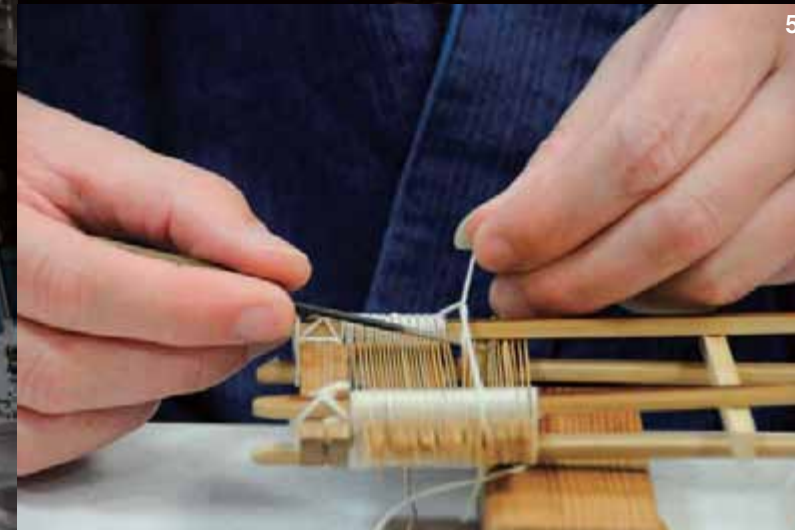
1 3



2



4 6



5



31



① SOHLA-1 (まいど1号) 搭載のバッテリーユニットの振動試験 ② まいど1号 (①②とも、東大阪宇宙開発協同組合提供)
③④ まいど1号打ち上げ成功、喜びに沸きたつ SOHLA 関係者たち



種子島宇宙センターからの中継大画面に映された、H-IIA ロケット15号機打ち上げの瞬間

雷観測衛星「まいど1号」、宇宙へ飛び立つ小さな世界一技術

製造業の夢と志

「打ち上げ一分前です」

種子島宇宙センターからの中継アナウンスが、東大阪市役所西隣、

クリエイション・コア東大阪三階の多目的ホールに流れた。待機する約三百人の人々は、一瞬、息を詰めて中継大画面を見つめ、カウントダウンが始まると「5、4、3」と声を弾ませる。そして、二〇〇九年一月二十三日午後〇時五十四分、オレンジの炎と白煙、轟音とともに、雷観測衛星「SOHLA-1 (まいど1号)」を載せたH-IIA ロケット15号機が飛び立つとホール内に歓声が沸き、拍手の波が広がった。

「最初に夢。でも夢だけやったらあかん。志がいる。最後まで夢と志を持ってあきらめず、成功するまでやり続ける――。私、これを成功の方程式、言うてます」。東大阪宇宙開発協同組合 (SOHLA) の専務理事、棚橋秀行さんは、八年越しの衛星開発の歩みを振り返ってそう言った。

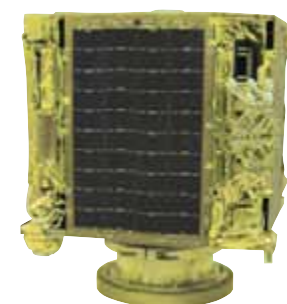
SOHLA 設立は〇二年十二月。不況と産業の空洞化、後継者難などに苦む大阪の製造業を活気づけ、若い世代を育てるために、東大阪をはじめ大阪府内の中小企業の「おっちゃん」たちが集まり、未知への挑戦が始まった。翌〇三年十月、SOHLA は NEDO (新エネルギー・

産業技術総合開発機構) の事業を受託。東京大学の中須賀真一教授が提唱する汎用小型衛星「PETSAT」の実用化プロジェクトに携わり、衛星の設計・運用を学ぶ基礎実証モデル「SOHLA-1」と軌道上の実証を行う発展実証モデル「SOHLA-2」を開発することになった。SOHLA-1 の基本技術は宇宙航空研究開発機構 (JAXA) が提供。衛星のシステム設計は大阪府立大学に、雷観測機器開発は大阪大学に依頼。衛星を構成するアマチュアバンド無線機、衛星構体、スピナー、プホイール、中央制御ユニット、バッテリーなどは SOHLA 参加企業の開発と決まった。

「おっちゃん」と、若手が力を合わせる

東大阪発の衛星開発プロジェクトは大きな注目を集め、すぐに取材や講演依頼が相次いだ。しかし、そこは中小企業の寄り合い所帯、当初はマネジメント力に乏しく、話題先行ばかりで実際の開発計画は進まなかった。そこで〇五年二月、新体制を確立。各社、若手社員を積極登用して開発チームを二組に分け、SOHLA-1 と SOHLA-2 の開発に同時並行的に取り組むことになった。

もともと、衛星機器開発の技術的課題は大きかった。「宇宙に行く時、ロケットの激しい振動に耐え、さらに真空中で、温度も日照時は百℃を超え、日陰時はマイナス数十℃という過酷な宇宙空間で故障せず動かないといけ



まいど1号

ない」と棚橋さん。バッテリー試験、衛星との通信実験、宇宙用はんだ付け実技試験と、乗り越えなければいけないハードルは幾つもあった。

もともとSOHLA参加企業は、ボーイング社認定工場として高度な航空機部品の加工技術を誇ったり、マイクロジャイロセンサシステムの開発で宇宙開発事業団の宇宙ベンチャー大賞を受賞したりする、技術力に優れた中小企業の集団だ。意欲的な若手技術者が着実に腕を磨いて衛星開発の成果を上げ、○五年にはフライトモデルを製作。以後、数々の試験をクリアして完成したSOHLA-1は、○八年八月末、JAXA筑波宇宙センターへ搬送された。

こうして○九年一月二十三日、温室効果ガス観測衛星「いぶき」に伴う副小型衛星の一つとして種子島から宇宙へ飛び立ったSOHLA-1の発する電波が、約四十



⑤次期衛星(実証モデル)に搭載される電源回路の試験

⑥SOHLA-1(まいど1号)搭載のHTRX(アマチュアバンド無線機)用送受信フィルタ設計シミュレーション

分後に地上で確認され(打ち上げ成功)、正式に「まいど1号」と命名された。

「若手が頑張る姿を見て、我々も頑張らなアカン、という思いが強かった。彼らには、この経験を生かして専門的な技術をさらに磨き、深く、広くマネジメントのできる人間に育ってほしい。それができれば、世界的な不況でも中小企業が立ち向かっていける」

そう言って、棚橋さんは、SOHLAの理念「夢で始まり、情熱を結集し、こころ豊かな社会を創る」を語らじた。彼らの挑戦は、これから本番である。

地域の伝統芸能を継承し、世界的喝采を浴びて人々の「誇り」として息づく「淡路人形浄瑠璃」、千三百年の時を超えて実現する奈良・平城宮跡の「大極殿復原」、戦乱や社会の変化を乗り越えて日本の高度な織物技術を生み、伝え、広めてきた「西陣」、大阪の中小企業の「おっちゃん」が宇宙に挑んだ雷観測衛星「まいど1号」打ち上げ——地域に根づく「関西の底力」こそ、先の見えない深刻な不況を脱して、関西に新たな「夢」、「活力」、「発展」をもたらす原動力となるに違いない。

